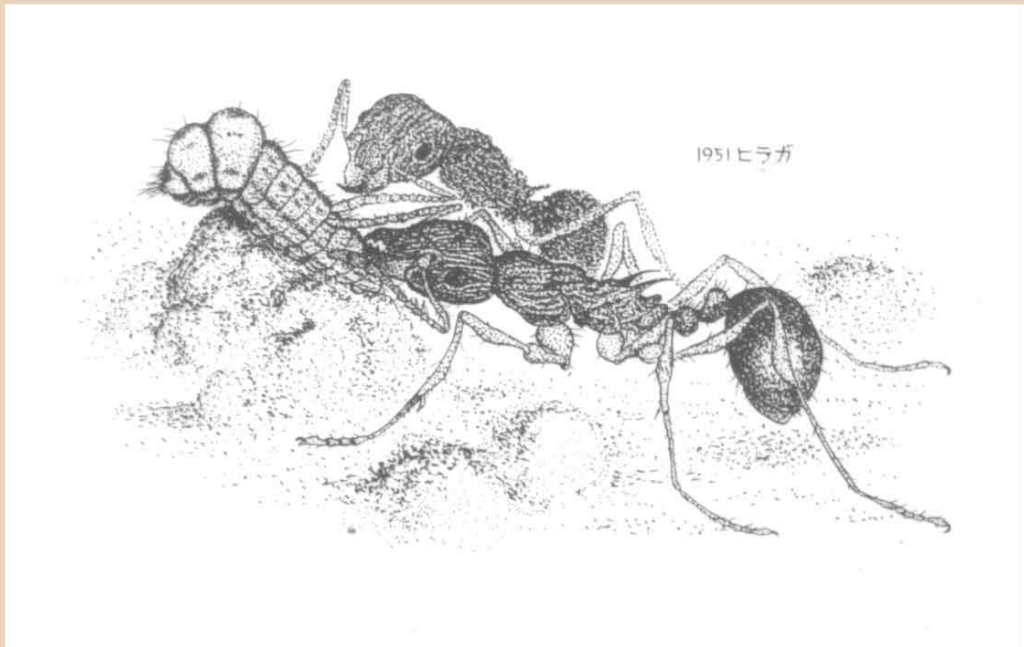


# オオゴマシジミの生態

平賀 壯太

「新昆虫」 Vol. 5 No.2 (1952) 北隆館

商業用転載を禁ず



平賀壯太（中学2年生）画

# 1 オオゴマシジミの研究 (全文)



## I 僕がオオゴマシジミを見つけるまで

昨年1950年8月7日苗場山に登る高校の兄に捕虫網を持っていつてもらったら、色々採集して来た中にオオゴマシジミが2匹あつた。1匹は登りの和田ヒュッテ辺(1300m)もう1匹は下りの赤湯辺(1200m)で捕つたという。三国峠(1243m)でも捕れているから山麓きの清水峠(1448m)にも居るだろうと見当をつけた。一昨年中学校の遠足で清水峠を越えた時の僕の採集品の中にベニヒカゲがあつたので、今年はその生態を調べる予定だから、オオゴマシジミが清水峠にいたら、少し難しそうだが同時にやつて見たいと思いました。

白水隆氏の「日本の蝶」…『その生活史はまだ調べられていない。しかしその経路習性の大要はゴマシジミや *arion* と同じであろう。本州中部ではクロバナヒキオコシを食うものと推定されており白水は如解金剛山で別亜種がカメバヒキオコシに産卵するのを見ている。』

8月4日清水峠への途中、檜倉沢と鳩水沢の間で、路傍のヒメトナノオの優しい淡紫の花房に1匹のシジミらしいものがとまって、しきりに翼を吸っている。早速ネットですくう。視ると羽化したばかりの美しい新鮮なオオゴマシジミだ。探したら60mほど離れたところにクロバナヒキオコシが数本あつた。更に路を進んで本谷

## オオゴマシジミの生態\*

平賀 壮太

(1000m) に来たらカメバヒキオコシが数本ある。

8月14日、本谷の支流の溪谷で(1000m)カメバヒキオコシとクロバナヒキオコシの群生地を見つける。

8月25日26日、山頂で一泊の予定で出掛け、上記群生地のカメバヒキオコシから、オオゴマシジミの卵、幼虫の出た後の卵殻、1令幼虫、2令と思われる幼虫等を見付け、この小溪谷を僕の便宜上「オオゴマ沢」と命名する。まだ孵化しない卵のついている花穂15ヶ所に、赤いテープで目じるしをつけた。今後現場で自然のまま観察する積りだ。小激の卵、幼虫と共に、カメバヒキオコシを根付きで持ち帰り庭に移植した。この日、100m程上流にも両種の植物が相当多くあり、その上を飛んでいたオオゴマシジミの成虫♀2匹を採集。更に頂上近くの(1400m)クロバナの群生する上を、オオゴマシジミが飛んでいるのを目撃した。

## II 食草

「オオゴマ沢」の食草群生地は、大小の石塊で埋まつた小溪谷で晴天にはチョロチョロ水が流れて居り、兩岸に樹木の生えた山が迫っている陰湿の地で、カメバとクロバナは群生して隣りあつている。始めカメバの方に卵、幼虫を見つけたが更によく調べたら(9月12日)クロバナにも卵が見つかった(脱出した卵殻)。その後清水峠への往復に注意していたら、カメバも

クロバナも街道のいたる所にあつた。他に花はカメバ、葉はクロバナに似た両種の間にある植物もあつた。(又、自宅から2Km近くの山麓(200m)にも両種が生えている。)

## III 卵

卵はカメバの萼、花梗、蕾、花穂にある小さい葉などに産みつけられ、中でも萼片に産みつけられたものが一

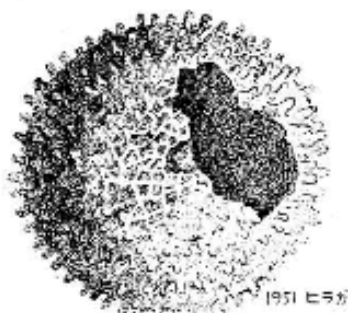


第1図 カメバヒキオコシの花にとまつてとなりの花の中に頭を入れて吸っている

番多い。カメバ程数多く調べてないがクロバナでは蓐、花梗に見られた。

一つの花穂に1粒ずつのことが多いが、2粒3粒のものもあつた。

卵は径0.7mm、蜜柑型、中心部に小陥凹部がある。産みつけられた時は水々しい淡緑色、時がたつと白くなる。拡大鏡で見ると白いボンボンダリアの花をみる様。顕微鏡で見ると網目模様の結び目が球頭に突起し、この

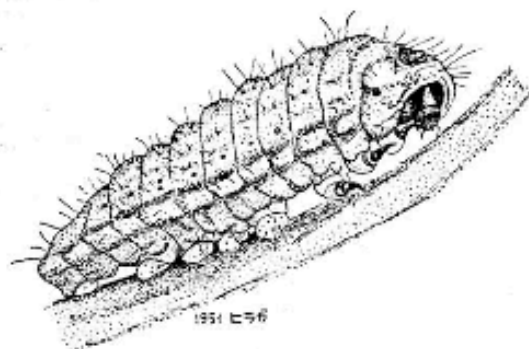


第2図 卵黒い箇所は幼虫の脱出穴

突起から四方に梗が伸びて各突起を結んでいる。幼虫の脱出孔は半月型、ダルマ型等で、卵殻は喰べない。

#### Ⅳ 幼 虫

8月26日2齢と思われるもの2匹、1令と思われるもの2匹を採集し飼育する。1齢幼虫は長さ1mm強で、内眼では青味のある黄土色、顕微鏡では美しい黄色。頭部は黒色。体に粗毛がある。2齢幼虫は体長3mm、ワラジ型。体側は硬となつている。内眼では褐色がかつた紫紅色。顕微鏡で見ると体は紫がかつた白い地に美しい桃色(ローズマダー)の縦縞がある。縦縞は体側の被の上と下を走る2条の線と脊線は太くて濃く、脊線と気門線の間を走る2条は細くて淡い。体表には粗毛があ



第3図 幼 虫

る。頭部は体の側に小さく、色は淡黒、第1節の下側に位置するので上方からは見えない。食物をとるためにのぼしたりすると、丁度亀が首をのぼした様に、第1節の下の部分が白く極長く伸びて、その先に黒い球形の頭部がついている。頭蓋の下方に6個の単眼が環状に列んでいる。胸部第1節は特異な形をし、背面には、円菱形の陥凹部があり黒くぼけて毛が密生している。胸部第1節の気門は特に大きく黒い半球状のものから円筒状のものが突出している。胸脚の先は黒く尖り、腹脚は白つぼい。

幼虫は、花を外から喰べたり、花筒の中に入って、内部から小さい孔をあけ、それを喰い広げたりする。蓐もたべることがある。花の中に入って居る時は見えないのは勿論だが、幼虫はカメバの蓐や花梗の色にまぎらわしくて、シャーレに僅かの花を入れて飼つて居る時でも毎日やつとで幼虫を見つけ出す。糞は葉を喰うものと違つてアメ色でネットリしている。あまり移動せず一つの花をたべるので糞は葡萄状に積み重なる。

大きい方の幼虫は8月31日は1日中花穂の茎にとまつてジッとしていたが、その後摂食せず、のろのろと動き廻つては又ジッとした。1齢幼虫は段々元気がなくなり2匹共8月31日・9月1日に死んでしまった。大きい方の幼虫も9月4日朝花穂の切口を包んで水をふくませた脱脂綿の下に入って死んでいた。(採集後10日目)。卵も孵化しない中に腐つてしまった。飼育がむづかしい。

僕は、現場で観察する方針だったが、その後、雨ばかり続き遂に夏休みも終つてしまった。

9月12日漸く晴れたので思い切つて学校を休んで「オオゾマ沢」に行つた。もう時期が過ぎて駄目だろうと思つたが、幸い1齢幼虫1匹(2.5mm)、2齢と思われるもの2匹(3.7mm)、体長4mmのもの(3令?)1匹を採集することが出来た。1齢の幼虫は内眼で焦茶色、採集した夜脱皮。拡大鏡で見ると体は紅紫色、各節間は淡緑。頭部は半透明灰色。胸部第1節脊部の円菱形陥凹部は白。体表に白つぼい粗毛がたくさん生えている。

(この幼虫は、シャーレの蓋をとつて他の幼虫を観察中罎に上つたのを知らず、蓋をしてつぶしてしまつた。)

翌13日体長4mmの幼虫は一日中静止を続け、14日も頭部を胸につけてジッとしている。これ迄は糞像がないだろうかと注意していたが何も認められなかつた。がこの日は第7腹節の脊線上に輪郭のぼんやりとした卵形のものが見られている。3匹の中2匹は花梗にとまつてジッと動かなくなつた。残りの1匹はまだ盛にたべて糞



をしている。

#### V. 蟻に逢せたら……。

「オオゴマ沢」ではいつも食草に1種の蟻が来ていた。8月25日食草の群生地から約4mはなれた山腹の倒れている枯木の下で、上記の蟻の巣があるのを発見した。約100匹の働き蟻、翅のあるもの、幼虫、蟻、卵等を採集して帶りその夜から WHEELER 氏の人工巣箱に入れて飼う。9月14日見ると巣箱の中央に幼虫室を造り、10数匹の幼虫、卵を入れて蟻は落付いている。毎日見ても餌場の方にはほとんど来ない。

14日21時餌場の一隅にオオゴマシジミの幼虫（前日からカメバの花梗にとまつてジッと動かないで居る）を置く。15日朝見ると同じ所に居るが、第1節の前腹部が白くなり、その部分の毛が脱落して失くなっている。第7節の蜜腺は明瞭となり、人間の閉じた唇の形。蟻は餌場の方に1匹も出て来ない。16日1時頃幼虫を巣場の蟻の通路に置いてみた。幼虫は食べなくなつてから3日にもなるので死ぬと困るから。

蟻はオオゴマシジミ幼虫に接触すると、たちまち異常に注意を引かれて、触角を動かして、しばらく調べている。間もなく触角をすばやく左右交互に動かして幼虫の下半身をたたき続ける（人間が洞をたたいてアンマをとる様に）。すると幼虫は体の前半をブルブルふるわせて胸部ごと第2、第3節を膨らませてくる。すると蟻は蜜腺に口吻を押しつけて動かさない。その中に他の蟻が2匹寄つて来て初めの蟻と3匹で触角でたたくと幼虫はますます胸部第2、第3節を膨らませて、その部分はテラテラと艶が出て半透明となつて張り切る。3時には4・5匹の蟻がたかづいてたが、幼虫は自から這つて蟻の孔に入り見えなくなる。

9月16日8時幼虫は見当らぬ。蟻は孔の外に自分の幼虫、卵を集合してある。

11時30分オオゴマシジミ幼虫の膨らませた第2、第3節の所をくわえた蟻が中央の大きい室の縁に現われて来

た。11時45分、卵の集めてあるすく側にくわえてくる。

13時、蟻の卵、幼虫群は同じ所にあるが、オオゴマシジミは見当らぬ。

14時40分に見ると、オオゴマシジミの幼虫は巣場の土の表面を這つていたが、孔から蟻が現われ、啜えたとすると、直に深い縦孔に引込んでしまつた。

同日20時30分、第2のオオゴマシジミ幼虫を蟻の巣場に入れる。たちまち2匹の蟻が寄つて来て触角でたたき始める。見つけたら最後幼虫か

ら離れない。憂鬱する様に触角でなでまわし駆つたいしている。

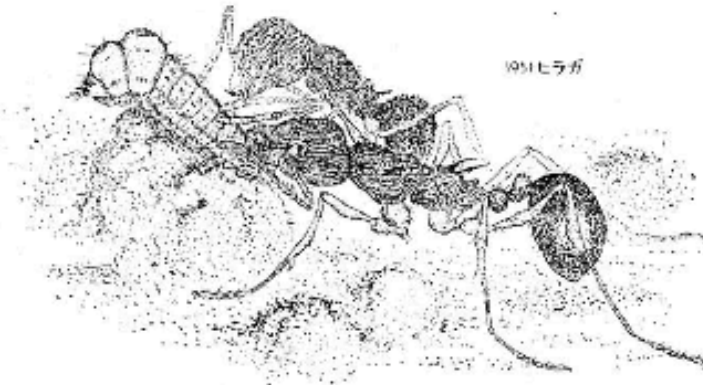
19日に第3の幼虫を入れた時も全く同様であつた。

この蟻が幼虫に対して示す関心は初めて遭遇した時が最大のような。日が昏つと、たたく時間も口吻を押しつけている時間も短く、幼虫は胸背部を膨らませはするが間もなく、しばませて歩き出し好きな方に這つて行き始め、この様にジッと待っていないようだ。

現在飼育中の蟻も幼虫も数が少なすぎて、越冬は困難であろう。来年雪が消えたら、「オオゴマ沢」に行き、蟻の巣を調べて、オオゴマシジミの幼虫、蟻を見つけたら、現場で観察したり、リシャル式採卵法で自宅で、たくさん飼つたりして、一步一步生活史をはつきりさせたいと考えています。

(1951年9月20日)

(新潟県南魚沼郡六日町 六日町中学校8年生)



第4図 幼虫は2、3節をふくらませている。1匹のアリは幼虫の蜜腺に口吻をおしつけ、1匹のアリは幼虫をたたいている。